琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

アトリエ琉游舎だより 19号

2018年1月30日発行

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2月4日は立春です

寒かったコリーナの冬も2月3日の節分を境に、4日から春となりますね。先日、道ばたで緑の葉の蓬草を見つけました。メイン道路の紫陽花も緑の芽を出し始めています。朝の鳥の声も賑やかになってきました。とは言ってもまだ2月。雪が降るたびに、また寒い朝を繰り返すたびに、だんだん暖かくなってくるのでしょうが、体感的にはまだ冬ですね。そこで琉游舎では明るい春の先駆けとして、立春の日に写経会を行います。皆さんの心の中に、一足早い春を実感してください。

写経会
2月4日（日）
13時半から

写経会
2月6日（火）
13時半から

★両日とも観音偈（法華経観世音菩薩普門品第25の偈文）の写経です。同じ内容なのでどちらかの日あるいは両日参加頂いても結構です。
★なぞり書き用の写経用紙をご用意しています。
★小筆と墨をご用意しています。何も持たずに起こしください。もし小筆か筆ペンの細文字用、書道用具をお持ちの方は持参いただければ幸いです。
★字の巧拙は全く関係ありません。書道初心者のお子さんから、字は書くのではなく打つことばかりのお母さんお父さん、未だに手紙は毛筆でしたためているという達筆の方まで、どなたでも気楽にご参加ください。

次回読書会
2月13日（火）
13時半から

次回詩話会
2月17日（土）
13時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

2/1 木	13時半	ひとり息子（87分）	小津安二郎監督、女手ひとつで息子を育て大学進学のため、学費を捻出して東京へと送り出世しているはずが夜学教師として妻子と貧しい生活を送っていることを知り愕然とする母親。
2/8 木	13時半	同胞（127分）	山田洋二監督、倍賞千恵子、寺尾聡主演。東京と過疎の村の若者たちが故郷のために青春の力を捧げる、1975年日本の農村の若者たちの夢実現の物語。
2/15 木	13時半	陽のあたる場所（122分）	エリザベス・テーラー、モンゴメリー・クリフト主演。57年度アカデミー賞監督賞受賞作品。貧しい生まれながら野心ある男の出世の過程の果てに起こる恋愛悲劇。
2/22 木	13時半	ダウンタウンヒーローズ（120分）	山田洋二監督、薬師丸ひろ子、中村橋之助主演。昭和23年最後の旧制高校生たちの輝ける自由と未来の日々。城下町松山を舞台にした青春映画。

狂言綺語・・・地獄極楽

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

今回は地獄と極楽についての話です。私は教訓めいた話は苦手ですし、好きでもありません。教訓は他人から与えられる倫理観だと思っていますので、もうその時点でありのままに観ることができなくなってしまいます。また地獄や極楽などの死んだ後の他界についても全く興味がありません。お釈迦様が言われたようにこの件は私も注1無記です。僧侶なのに人の疑問や悩みに答えないで「無記」などという無責任なことがよく言えるなと、自分でも思います。しかし思ってもいないことをさもあるかのように話して人をたぶらかしたり、「こんなことしたら地獄に落ちるぞ」と恐喝するよりはまだ無責任の方がましかなと思っています。

法話などでよく話される「地獄と極楽の箸」という教訓話があります。元の話はどうやら出雲の民話らしいのですが、こんな話です。“ある人がのぞき見た地獄の食事風景。地獄の住人のテーブルには大層なご馳走と長さ1メートルほどの箸が並んでいます。 地獄の人たちは、その長いお箸を使って、食べ物を自分の口に運ぼうとしますが、長すぎて食べることができません。必死にな って口までもってこようとするのですが、一口も食べられずに苦しんでいます。そして食事の時間が終わってしまい誰一人食事をとることができませんでした。次に極楽をのぞいてみると、ここも同じようにテーブルには大層なご馳走と長さ1メートルほどの箸が並んでいます。 ただここでは自分で食べようとせずに、向かいの相手に食べさせてあげるのです。食べさせてもらった 人は、お返しに相手の口に食べ物を運んであげています。互いに食べさせあうことで、幸せで楽しい食事の時間となっていました”とさ。

この教訓話は分かり易いですね。「自分のことだけ考えて行動すればそこは地獄」「他人のことを思いやって行動すればそこは極楽」しかし私は教訓話は苦手で嫌いですと言った手前、ここで「地獄も極楽もあなたの心の働き次第です。だから人の為に行動すればそこはもう極楽なのです」というような道徳先生になるつもりはありません。「人の為に行動する」という言葉にはどうしても自己満足と偽善の臭いを感じずにはいられないのです。広辞苑には『為にする：ある目的を達しようとする下心があって事をおこなうのにいう。』とあり、詩人の吉野弘は『人の為とは偽りさ』注2と詩に書いています。

私は地獄の住人は何故、箸を使うことにこだわり、手づかみで食べることをしなかったのだろうかとついつい不道徳なことを考えてしまいます。箸で食べることが規則だからと言われても、そもそも地獄の住人は規則を守らず悪いことをしたから地獄に住んでいるのです。もちろんこんなことを言ったらこの教訓話は成り立たないのは承知の上でのいちゃもんなのですが・・・。現実世界では地獄と極楽が別々にあるのではなく、ある人にとっては極楽であり、ある人にとっては地獄なのです。極楽の住人になりたかったら時には地獄の振舞いをしなければいけないでしょう。みんなが長い箸で食べることにこだわっている中で、一人だけ手づかみで食べたり、箸を半分に折る工夫をしたり、あるいは相手に先に食べさせてもらって、後は知らんふりというような行動をした人がどうやら自分なりの極楽を勝ち取っているようです。正直者や真面目で不器用な人間、人の言うことを信じてしまう人にとってはこの世界はどちらかと言うと地獄で、地獄の振舞いができる人には極楽と言う、とてつもないパラドックスが起こってしまうのです。もちろんお釈迦様の教えは、地獄の振舞いで得た仮の極楽は本当の安らぎのところではなく、いつでもそれは地獄に変わるものだと言っているのは承知の上でのいちゃもんです。

さて、立派な法話がなにやら正直者は馬鹿を見るような話にも見えてきてしまいました。自分なりの極楽を得ようと思っている人間にはこの教訓はとても都合の良い話になり、みんなと一緒に同じ極楽を得ようとしている人にはとても残念な話にすり替わることができるのです。私が物を斜めからや横から見たがる性格だと言われればそれまでですが、視点をずらすこと、見方を変えることで、「ありのままに観た」とわたくしが言っていることが、本当に「ありのままの姿」であり「安らぎのところに」辿り着くための「行い」になっているかどうかの確認をしているのだとも言えるのです。

仏教の教えはとても危険な教えです。ある社会的立場をもってその教えを説くとき、それは簡単に権力となります。日常生活（娑婆世界）の中に地獄も極楽もあるという教えは、教える側（僧侶や先生）や指示する側（権力）からみるととても都合の良い教えであり、それを無批判に受け入れた教えられる側は、地獄と極楽を人質にして行動をコントロールされてしまう危険が大きいのです。お釈迦様の教えは教えられるものではなく、自らの「行い」によって感得していくものだと信じています。もし私に何か出来ることがあるとすれば、それは教えたり与えたりすることではなく、一緒に歩くことです。
一緒に歩くことは、一緒に「行う」ことです。「地獄や極楽はあるの？」
という疑問も、ひょっとしたら一緒に歩いていくことで、
何か観えてくるものがあるかもしれません。
それではまた次号でお会いしましょう。（出琉）

琉游舎：戸井　出琉・恭子
お問い合わせ先：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319ー17コリーナ矢板Ｃ－８５０
アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

注1：「無記」詳しくは琉游舎だより第15号をご覧ください
注2：人偏に為で「偽」という文字になる